

対象疾病	対象者	疾病の概要
季節性インフルエンザ	○生後6か月以上で定期接種の対象者を除く全年齢	○感染を受けてから1～3日間ほど潜伏期間の後に、発熱、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などが突然現れ、約1週間の経過で軽快します。 ○特に高齢者や基礎疾患を持つ患者で入院や死亡の危険が増加することがあります。
おたふくかぜ	○1歳以上	○ムンプスウイルスにより全身感染症で、唾液腺の腫脹が主症状です。 ○合併症には、無菌性髄膜炎や難聴、不妊の原因となる精巣炎や卵巣炎があります。
B型肝炎	○HBs抗原陽性の母親から生まれた乳児	○B型肝炎ウイルスは、血液を介して感染します。急性肝炎の症状としては、黄疸、全身倦怠感、食思不振、悪心、嘔吐などで、ほとんどは3か月以内に軽快します。 ○ウイルスは長期にわたって肝細胞内に生存（持続感染）し、将来、肝硬変から肝がんに進展する可能性があり、定期的な検診が必要です。 ○保健所や医療機関において無料で検査を受けることができます。一生に一回は検査を受けましょう。
	○ハイリスク者（医療従事者、腎透析を受けているもの、海外長期滞在者など）	
	○汚染事故時（事故後のB型肝炎発症予防）	
A型肝炎	○全年齢	○A型肝炎は経口感染し、急性肝炎を引き起こすことがあります。 ○途上国などでは、常時感染の機会があり、途上国への旅行者を中心に摂取が行われています。
黄熱	○9か月齢以上	○黄熱の流行は西アフリカ、南米のアマゾン川流域に最も多く、ネッタイシマカを中心とする媒介蚊の発生する雨季に多く発生します。 ○免疫のない渡航者では致死率が60%に達すると言われています。
狂犬病	○全年齢	○狂犬病は犬に限らず、ほとんどすべての哺乳動物が罹患する。その咬み傷によって人に感染すれば、治療はななくまず100%死に至ると言われています。 ○日本では昭和32年以降、国内感染例は報告されていません。 ○世界的には各地に存在しており、年間3万人を超える患者さんが報告されており、海外渡航に際しては十分が注意が必要です。
破傷風	○全年齢	○破傷風菌は、土壤中に広く分布しており、外傷、火傷などからヒトの体内に侵入します。 ○破傷風の症状は、全身の筋肉にけいれんが生じる“全身性破傷風”が典型的です。感染してから通常3週間までの潜伏期間を経て、徐々に全身の筋肉に影響が現れます。
麻疹風しんワクチン（MR） 風しんワクチン	○抗体価が低い者等定期接種の対象者以外の者	○妊婦が風しんにかかることで風しんウイルスが胎児に感染し、先天性風疹症候群（難聴、先天性心疾患、白内障及び網膜症等）を発症することがあります。 ○妊婦は予防接種を受けられません。妊娠を希望する女性や妊婦の夫、同居家族などについては、抗体価検査を行い、抗体価が低い場合には予防接種を積極的に受け、先天性風疹症候群を予防しましょう。 ○県では無料の抗体検査事業を行っています。詳しくはホームページで確認ください。
百日せき・ジフテリア・破傷風3種混合（DPT）	○5歳以上で初回免疫が完了している者	○就学前の児の百日せき抗体価が低下しているため、就学前の追加接種（5歳～7歳半）を日本小児科学会が推奨しています。
不活化ポリオ	○4歳以上で初回免疫が完了している者	○ポリオに感染すると上気道炎又は胃腸炎症状を呈する。感染者の1,000～2,000人に一人に麻痺を生じ、一部のものは永久麻痺を起こします。 ○これまでは経口生ポリオワクチンにより、ポリオの根絶そしてその状態の維持を行っていたが、平成24年9月から四種混合ワクチン（DPT-IPV）として定期接種が行われています。
帯状疱疹（水痘生ワクチン）	○50歳以上	○小児期の初感染では水痘を起こし、通常は自然によくなります。しかし、ウイルスは神経節に潜んでおり、加齢などで免疫力が低下した際に、再び活性化し、はじめは皮膚がピリピリするような痛みを感じ、時間の経過とともに赤みや水疱形成などの皮膚症状が現れます（帯状疱疹）を起こします。50歳以上で頻度が高くなります。 ○皮疹が治った後も、疼痛や感覚異常などの後遺症が数年にわたって続くことがあります（帯状疱疹後神経痛）。 ○水痘生ワクチンは1回接種、帯状疱疹ワクチンは2回接種です。
帯状疱疹（帯状疱疹ワクチン）	○50歳以上	